

# 「なにはつ - あさかやま」歌木簡解説シート

作成 甲賀市教育委員会

## 紫香楽宮について

紫香楽宮は、8世紀中頃の聖武天皇によって造営された都です。その期間は、わずか3年あまりと短命でしたが、近年の発掘調査で次々と新しい発見があり、これまでの説とは異なる本格的な都の姿が徐々に浮かび上がってきました。

そして、紫香楽宮では他の奈良時代の都と同様に官人たちの活動が盛んに行われていた事を証明する出来事的一端として、今回の「歌木簡」の発見があったと考えられます。

紫香楽宮が初めて記録に表れるのは、天平14年(742)8月11日の条に恭仁宮の離宮として造営長官等の任命と行幸の予告した記述です。

そして26日には、聖武天皇は2000人以上の役人とともに信楽の地を訪れますが、わずか2週間の短期間で、多くの人々を収容する施設が作られたとは到底考えられませんから、同年2月に恭仁宮から近江国甲賀郡に至る道路が開通したという記事を参考にすると、紫香楽宮は、建設物資を輸送する道路が開通した直後に始められ、1年ほどの受入れ準備を整えた後、行幸の詔が出されたものと考えるのが妥当でしょう。

聖武天皇は、第1回目の行幸以降たびたび紫香楽を訪れ、天平15年(743)10月に大仏(毘盧遮那仏)を建立するために、信楽の甲賀寺の建設を進める詔をはじめとして次々に紫香楽宮造営のための指示を出しています。

さらに天平15年末には首都であった恭仁宮の建設工事を中止し、紫香楽宮造営に総力を挙げてかかるよう命令が出され、天平17年(745)正月元旦には、「新京」と称され、実質的に首都としての宣言を意味する「大楯槍」が宮門に立てられました。

しかし、3月頃からは、群発地震や紫香楽宮遷都に反対する人々による放火と見られる火事が相次ぎ、5月には天皇は紫香楽宮を離れ、二度と戻ることはありませんでした。

『続日本紀』などの史料に記録されている紫香楽宮の施設として、天皇の「宮殿」のほか、民部、大蔵省などの「中央官庁」、参議(現代の国务大臣に相当)藤原豊成などの「貴族や役人たちの邸宅」、建設に従事する「庶民の自宅」、紫香楽宮で生活する人々に欠かせない「市場」などがあった「市街地」の存在、さらには大仏造立や紫香楽宮造営の大事業も併行して行なわれていましたから、多くの人々が信楽で生活していたことが考えられます。

## 宮町遺跡の発掘調査

遺跡の発見は奇跡的な偶然の発見から始まりました。

昭和46年頃に宮町地区の住人が大きな柱根を保管しているとの情報が教育委員会によせられ、保管主に話を聞いてみると、雲井地区の水田区画整備工事の際、近くの工事現場で発見し、自宅で保管していたが、もう数日遅ければ、割り木にして焚付材料にでもしようと考えていたとのことでした。

保管されていた柱根は3本あり、いずれも直径が30~40cmもある立派なもので、柱に加工するための面取りの痕跡が残り、古代の大規模建物の建築部材であることは明らかでした。

その後、昭和55~57年にかけて周辺で遺跡の分布調査を実施した際には、水田の広い範囲で奈良時代の遺物が見つかったため、昭和58年度から遺跡範囲、性格を確認することを目的として宮町遺跡の発掘調査がスタートしました。



紫香楽宮関連遺跡の分布地図 S=1/40000

さらに、最初に発見された柱根に樹皮が残っていたことから、「年輪年代測定法」という分析調査が行なわれ、柱根の伐採年代が紫香楽宮造営期に一致することが判明し、宮町遺跡が紫香楽宮跡関連遺跡であることが決定的となりました。

平成 12 年には、宮町の盆地中央で「朝堂区画」と推定できる長大な脇殿が見つかったことから、紫香楽宮の宮殿が宮町遺跡であることが明らかになり、それまでの調査成果を考え合わせると巨大な中心区画を取り巻くように付属する役所が作られていたことが想定できるようになりました。

## 「歌木簡」の出土について

### 出土した遺構

今回報道された木簡は、平成 9 年(1997 年)度実施した宮町遺跡第 22 次調査の西大溝から出土しました。

西大溝は、紫香楽宮中枢部の西側を南北方向に流れる区画溝で、紫香楽宮の基幹排水路として使用されていたことが推定できました。

この溝は平成 7～11 年(1995～99 年)度にかけて調査し、幅員が 9.0～17.5m、検出長 113.2m(合流部上流 74.6m 合流部下流 38.6m)、深さが 1.0～2.0mあることがわかっています。

また、出土遺物として、多くの土器や木製品などともに木簡 200 点・削屑 5898 点(内、22 次調査分 木簡 5 点・削屑 130 点)が発見されています。

特にこの溝から出土した木簡の点数は、宮町遺跡全体から出土した量の 85%を越え、木簡の宝庫ともいえる遺構です。



### 木簡の時期

今回出土した「歌木簡」の年代については、西大溝の性質と出土した年号の記された木簡が手がかりになります。

木簡の捨てられた時期の上限については、紫香楽宮の造営が開始された天平 14 年以降に基幹排水路として西大溝の開削が始まったと考えられ、下限については、西大溝が 8 世紀中頃のある時期に人為

的に埋められた状況と区画外側に相当する西岸にも溝の方位に一致する掘立柱建物が検出されていることから、埋め立て後も造営工事が行われていたと考えられ、その造営工事は、天平 17 年(745)5月の聖武天皇の平城京移動まではつづけられたとみられます。

この推測を裏付けるように、年号の記載がある木簡は 13 点で、いずれも年紀は、天平 15～16(743～744)年に限定され、最もあたらしいものは、天平 16 年 9 月 20 日の某国の中男作物の荷札です。

また、天平 16 年の隠岐国の調という税種の荷札が出土していることから、当時の税の納入期限を考えると天平 16 年 12 月 30 日以降から、中身の使用にあたって包装材が廃棄された時間差を考慮すると天平 17 年初めまでの期間に廃棄されていた可能性が高いと考えています。

つまり、「歌木簡」は、他の遺物の廃棄時期から考えて、天平 15 年後半から天平 17 年初めころまでに捨てられたと考えられます。

#### 『万葉集』との関係

「あさかやまの歌」が掲載されている『万葉集』巻 16 は、天平 17 年(745)以降の数年の間に成立したと考えられ、今回出土した歌木簡の年紀を、捨てられた時期の下限と考えている天平 16 年末～17 年初以前としても、『万葉集』の成立よりも早いと考えられます。

つまり、今回の木簡は、『万葉集』を見て、そこに載っているあさかやまの歌を書き写したのではなく、それ以前にあさかやまの歌が流布していたことを表し、一方では木簡に書かれ、他方では『万葉集』に収められたと解釈できます。

あさかやまの歌について、木簡と『万葉集』は兄弟関係にあると解される。

『万葉集』と同じ歌がはじめて木簡で出土した。

#### 『古今和歌集』との関係

『源氏物語』や『枕草子』にも影響を与えたとされている『古今和歌集』の仮名序には、「難波津の歌は、帝の御初めなり。安積山の言葉は、采女の戯れよりよみて、この二歌は、歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の初めにもしける。」とあります。

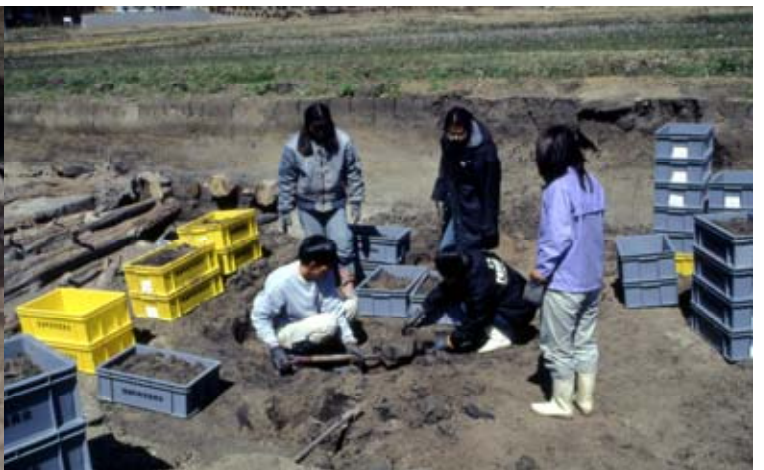
このことから、古今集が後世の和歌に影響を与えたと解釈されていましたが、今回の発見によって、「なにはつ-あさかやま」の歌が少なくとも紫香楽宮の時代にセット関係と意識されていたことが判明しました。

ただし、歌の父母という観念、手習う人が初めに習うということが天平時代にすでにあつたかどうかは不明です。

この 2 歌のセット関係が、天平 16 年(744)末～17 年(745)初めごろに既に成立していたことが判明。一挙に 150 年以上さかのぼった。



歌木簡が出土した西大溝の様子



西大溝の土壌採集の様子

奈迦波ツ尔 佐久夜己能波 奈布由己母 理伊麻波々流倍等 佐久夜己乃波奈

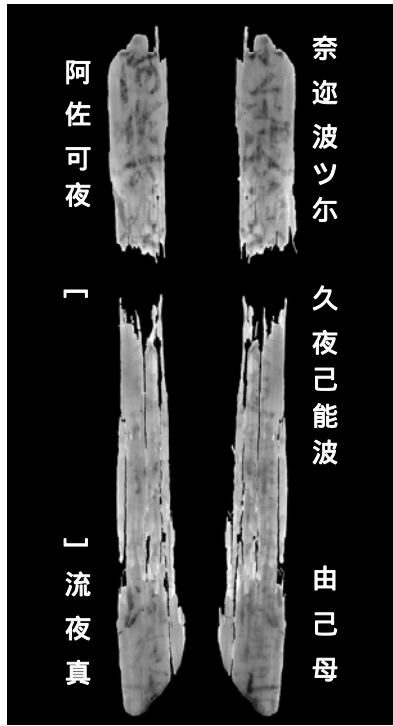
奈迦波 奈佐久夜己能波 奈布由己母 理伊麻波 流倍等 佐久夜己乃波 奈

阿佐可夜 麻加氣 佐閑美 由流夜真 乃井能安 佐伎己々 呂乎和可於母 波奈久尔

阿佐可夜 麻加氣 佐閑美 由流夜真 乃井能安 佐伎己々 呂乎和可於母 波奈久尔

奈迦波ツ尔 久夜己能波 由己母

阿佐可夜 「流夜真



出土木簡から推定した「歌木簡」の推定復元模型

推定した木簡の形態と文字配置については、栄原永遠男大阪市立大学文学部大学院教授の万葉仮名については、犬飼隆 愛知県立大学大学院教授の指導を得ました。また、木簡作成にあたっては、井上桂雪さんの協力を得ました。

出土木簡の写真(実物の約40%)

デジタル撮影による赤外線写真  
撮影 奈良文化財研究所

出土した木簡は、四辺とも原形をとどめていませんが、推定で本来の形を推定したのが、右の図です。

復元に当たって、二片の材に残っている文字の大きさから全体の文字数の大きさを推定すると、計測部位によって異なりますが、「あさかやまの歌」の面が、五二八〜五四四ミリ、「なにはつ」の面は四一五〜四六五ミリとなり、前者が長い材を必要としたと考えられ、あさかやま面の下端側にも余白が存在したことを考えられることから、全体で2尺程度と推定しました。

また、文字の使い方や、筆使い、歌の内容などからも様々なこともわかります。

木簡に書かれた文字は、一音一字の表記となっており、和歌を詠むために書かれたと推測できます。

「なにはつ」の面には、「迹」や「能」などの他の木簡でも使用例のない文字が使われていることから、かしまった表記のような印象を与えます。

筆使いは、「あさかやま」の方がすこし右上がりを書く癖はありますが、書き慣れているのに対して、「なにはつ」の方は、文字のバランスが悪く、稚拙な印象を与えます。

歌の内容では、「なにはつ」の歌「が歌の父、公の場の歌、「あさかやまの歌」は歌の母で私の場の歌とみられます。

これらのことを考えると、この二つの歌は、同じ状況で書かれたのではなく、少し時間差があること。また、断定はできませんが、筆跡から別人が書いたとも考えられます。